

外出自粛のおかげで時間を持て余している団員の皆さんへ、T1の佐藤(國)さんから“暇つぶし”にと下記の新聞記事の投稿がありました。

“感染症”がらみで「明治初期の出来事」が取り上げられています。記事の題名に注意！
要は、過度の体力消耗は感染の元となるので日ごろの節制が肝要だ、ということらしい。

【HP担当 市村】

R2.3.11 読売新聞



磯田道史の

なやご

題字・種村 山童

新型コロナウイルスのせいで公務や講演が取りやめになり、一日だけだが暇ができた。こんな時は京都の骨董屋をひやかして歩くに限る。この騒動のなか書画骨董を探して歩く人は少なからう。爆買いの中国客も消えた今、骨董屋もあれこれ考えるに違いない。「珍しい古文書が出てくるのはこういう時かもしれない」と淡い期待を抱いて家を出た。

すると本当にあった。公家の日記であった。公家は130家ほどしかない。近年は滅多に出てこない。明治四年(1871年)のもので維新直後の様子がよくわかる。パラパラめくると公家本人ではなく家臣が「詰所」でつけた日記で醍醐忠順家のもので確信した。

ところが困った。店内には、もう一人業者がいて「その日記はもう売れた」と店主がいう。困った。どうしても、この日記は要る。研究したい。業者に流れば、史料はどこへ行くかわからない。思い切って交渉してみた。「すみません。この日記

ねやごとにも自粛要請

は学術的に重要です。売ってください」。幸い、妻は金に頼着しないので、私の本代に文句を言わない。業者も鬼ではない。必死で提示した買値が良かったのか、哀れに思ったのか売ってくれた。

こうまでして買い取ったのは理由がある。日記には、日本人が「伝染病」と戦う姿が克明に記録されていたからである。約150年前、新政府がパンデミック(世界的流行)に直面した時のさまを本欄に書きたいと思った。

パンデミックといっても、この時は家畜伝染病であった。シベリア海岸にリントルペスト

(牛疫)流行起り追々蔓延。日本へも伝染すべき有様なれば日本政府へ御忠告」と、上海駐在の米国領事が外務省に知らせた。この病気は「空気中に運ばれ、或は人身よりし、又、衣類・諸品よりし、或は又、既に病みし獣類の病原を含める物等により伝ふ」「伝染を受けたる獣類は残らず直に打殺し、其屍骸を火中に投じ焼捨べきなり」と記されていた。新政府はこの全文を翻訳し、すぐに日本全南に布達。公家の醍醐家にも、それが来た。



画・村上 豊

に付着して感染が拡がるなどの新知識が明治の日本人の脳に入ってきたのである。これをきっかけ、京都府は「家内邸内は勿論、村々町々、溝さらへ」を命じた。府民あげての一斉掃除が始まった。「正常に掃除致すべし。所役人ならびに家の主人に於て心付、指揮方怠惰致すまじく」というのだからすさまじい。

そして新政府は予防法を示した。開港場で「厳に入舟を改め」た。病人があれば「医官改の上、其病にあらざれば上陸を免す」ことにした。これが検疫の開始である。そして、今と全く同じことが、明治四年に行われている。手洗いがいを奨励した。

「身体を清浄にし、なるべくたけ衣服を洗濯し垢付さる様」にし、「天気よき日には窓を開き風入をよく」、家の換気を国家が要請したのである。

それだけではない。国家は国民の日常生活へも制限を加えた。疲れると、病気への抵抗力が落ちるからである。飲酒はもちろん性行為の回数を減らせとまで布告した。「酒家は絶て禁するに及ばざれども、暴飲すべからず、かつ房事(性行為)を節にすべし」である。こんな布告が回ってきて、醍醐家では家来が詰所で丁寧に日記に書き写している。

革命政府たる明治国家は徹底したリアリズムの政権で、パンデミックになると、国民のねやごとにもまで嘴を入れた史実を指摘しておく。

(日本史家)